小学校の事例 東 区 本町小学校

学校と地域のつながりが、児童から地域への呼びかけに発展。

地域の幼稚園や老人ホームとの交流がエコ活動のきっかけに。
児童会長の積極的な働きかけにより、地域のスーパーの活動協力へとつながった。
地域とのつながりから生まれた車いす贈呈という目に見える効果は、子供たちのやる気や環境意識を高め、新しいアイディアを引き出す源となっている。

はじまり 地域的な土台を生かした協力体制を基盤に

本校では4年生は総合的な学習の時間で老人ホームと交流し、5年生も同じく総合的な学習の時間に地域の幼稚園・保育園と交流をしている。その流れの中で、町内会と一緒に地域の公園清掃を行うことにもつながり、さらにエコへの活動（リングプル回収）が生まれた。

今では町内会や近所の道営住宅の方が学校へリングプルを提供することが日常になっており、この協力体制が様々な活動の基盤になっている。

本格的な活動開始は7～8年前。心のつながり（心と心の交流）が根底にあり、「地域と学校の関係」は「児童から地域への働きかけ」になった。

老人ホームとの交流①

内容 社会科で学習したことが原動力 スーパーの協力体制も整備

エコリサイクル委員会が中心となって回収し、交換した車いすを地域の老人ホームに寄贈する活動をしている。昨年1台を、過去5年以内にも1台を同施設へ贈呈してきた。

回収啓発の工夫として、ポスターの掲示や毎月定期的な回収量（重さ）の発表、そして、近所のスーパーに学校名の入った回収ボックスを置かせてもらうことなどを行っている。委員会の原動力は、4年生の時、社会科の学習で学んだ「環境に関わるごみやリサイクル」のこと。学んだことを生かそうと、高学年になった今、積極的に取組んでいる。

また、現在も町内会から協力があり、ワゴン車いっぱいになる程の量の提供があるので、車いすへの交換が比較的早くできている。結果が見えることで子供たちの意欲が高まり、大きな助けになっている。

老人ホームとの交流②

効果 地域の見守る目が やる気や環境への関心に

地域の目が子供たちに向けられ、行き届いているので、子供たちは安心して学習することができる。地域ぐるみで活動を見守ってくれることで子供たちのやる気も増し、環境に対する関心も高まっていく。

特に、車いすとの交換、贈呈という実績は、目に見えることで、主体となる子供たちの意欲を高めており、「タオルを雑巾として再利用してはどうだろう?」「使えなくなった傘を使って何かよいアイディアはないか?」など、興味が広がり、様々なアイデアが出てくるようになっている。

幼稚園との交流

広げよう つなげよう 環境学習の輪

実施校からメッセージ

地域との交流や連携があってこそ様々な活動ができるので、学校だけではなく地域の協力を得て行っている今のエコ活動を、今後も続けていきたいと考えています。少子化による人手（教員）の不足や時間の問題など様々な課題があるため、「環境教育」を進めていくのはなかなか簡単ではありません。低学年が高学年をお手本にして、近づこうとすることをうまく生かして、自然なかたちで高学年の活動を目にし、一緒に行動することから学びとってくれればよいと願っています。